

ICTを活用した性に関する指導教材の開発と実践

特別支援教育、性に関する指導、教材データベース

長野県稲荷山養護学校

〒387-0022
長野県千曲市野高場1795<http://www.nagano-c.ed.jp/inayou/>

1. 研究の背景

学校現場における性に関する指導とその教材開発については、2003年の都立七生養護学校事件を代表とする「性教育バッシング」以降、教育現場自体の萎縮により足踏み状態にあると言える。しかし、性情報の氾濫など社会環境の変化により、性行為の低年齢化、人工妊娠中絶の低年齢化、性感染症の拡大、障害者の性被害等、社会的に多くの課題を抱えているのが現状である。そのため、学校教育での性に関する知識の習得と実践行動の習得については、学校種を超えて大きな課題となっている。とりわけ言語理解や想像力面での困難が大きい、特別支援学校の児童生徒にとっては、性に関する指導は非常に難しく、一人一人の子に合った教材や授業カリキュラムの開発は急務であると言える。

このような現状を踏まえ、児童生徒にとってわかりやすい教材と、教員が取り組みやすい環境を整えることで、性に関する指導方法を充実させたいと考えた。

長野県の特別支援学校は、タブレットPCの導入が全国的に見ても比較的早く、特に本校はその活用実践で県内の中心的立場にある。無線LANやサーバシステムが整備され、日常的な活用も盛んである。このような基盤を生かして性に関する指導の電子教育素材を開発し、共有することを目的として研究を開始した。

2. 研究の目的

本研究の目的は以下の3つである。

- ① 児童生徒が自分自身で操作しやすい学習教材を開発する
 - ・過去の視覚教材の良さも踏まえ、タブレットやコンピュータのわかりやすい操作性や共有のしやすさを生かした電子教材を開発する
 - ・過去の実物教材の良さを生かしつつ、電子教材と連携できる物を開発する
- ② 開発した教材を用いた授業実践を行う。授業評価を元に、校内向けに「性に関する指導情報データベース」として公開する。
- ③ 「性に関する指導情報データベース」の中でも特に、基本的かつ効果的な学習教材と指導案を校外に向けて公開する。

これによって、特別支援学校の児童生徒が、性的事件の被害者や加害者になるリスクを軽減し、よりよい生活づくりの一助になることを目指す。

3. 研究の方法

本研究は大きく分け、学習教材開発と授業実践の二つの側面から取り組む。

(1) 学習教材開発

○性に関する指導用教材の開発

- ・ 「性に関する指導用画像データ集」の作成

「画像データ集」を元にした「指導用教材」の作成（PC・電子黒板・タブレット上で使え、児童生徒が、簡単に操作し考えを深められる視覚的情報や音声情報を統合した教材。基本形はパワーポイントのスライドとして作成する）。

- ・ 具体物操作とタブレット教材を連動させることができる「指導用人形」の作成

（操作に応じて、タブレット側から信号を送信することで、音声や振動を発生させるユニットを人形に内蔵させる）

- ・ 「ICTを活用した性に関する指導案」の作成

○校内向け画像データベースの構築

- ・ 上記「性に関する指導用画像データ集」「指導用ソフトウェア」「ICTを活用した性に関する指導案」を閲覧できるデータベースの作成。校外に発信することを前提に設計を行う

- ・ データベースの校内サーバ内運用

(2) 性に関する指導の授業実践と評価

○「ICTを活用した性に関する指導」の基本授業案を元にした授業実践

- ・ 実践評価のための学習グループに対して、各学期に1単元ずつ実践を行う

○授業分析と評価

- ・ 学年、性別、障害種などの観点から、学習効果の評価を行う
- ・ ビデオ分析による児童生徒の理解度評価、授業者・生徒への聞き取りとアンケートを行う

4. 研究の内容・経過

(1) 研究の内容

研究計画にしたがい、学習用基本画像セットの作成を進めた。まず基本的な画像パーツを、研究代表者が開発用コンピュータ及びタブレットを用いて作成した。最初に作成したのは、幼児期から青年期までの、体の変化を男女別に5パターンに分けたものである。それをベースに教材開発担当教員がパワーポイント上に配置し、数種類のアニメーションと操作ボタンなどを付加し、簡単な提示用教材サンプルを作成した。それをカリキュラム作成担当職員共に確認し、並行して進めてきた授業展開案と合わせて、追加すべきデータや修正点を決め出していった。

このように本研究では、汎用性が高いと思われるデータを、プロトタイプとしてまとめてデザイン・開発し、それを用いた授業のシミュレーションを行いながら、授業案を作成していくという新しい手法を用いた。これによって、まず児童生徒にとって見やすく、分かりやすい教材提示と、授業で追究させたいポイントはどうかを具体的に考えながら授業を構想することができた。

(2) 研究の経過

○第Ⅰ期授業実践（1学期後半から2学期中旬）

- ・ 単元「自分の体について知る」（体の大切さへの意識）の授業

- ・ 単元終了後、係内授業研究会。ビデオを元にした授業分析。

○第Ⅱ期授業実践（2学期後半）

- ・ 単元「体の変化」（育っていく体への意識や生命の誕生など）の授業
- ・ 単元終了後、係内授業研究会。ビデオを元にした授業分析。
- ・ 2回の授業のまとめと教材の公開準備。ATACでの実践発表

○第Ⅲ期授業実践単元（3学期前半）

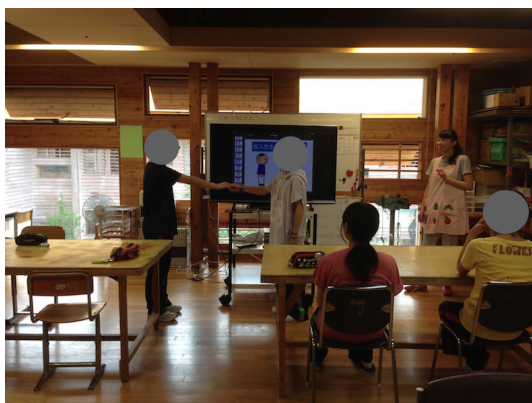
- ・ 単元「こんな時どうする？」（性をめぐるトラブル）の授業
- ・ 単元終了後、係内授業研究会。ビデオを元にした授業分析。最終報告に向けての授業評価

（3）実践事例

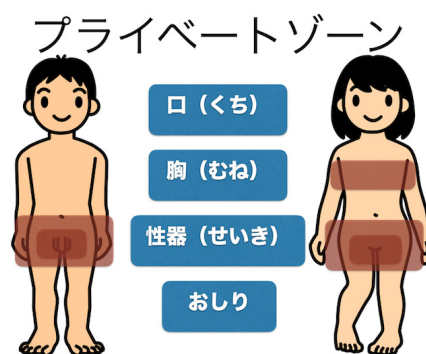
以下に主に高等部2学年で行った授業実践について、単元順に概要を述べる（最終単元については、参考資料として授業略案も含めた）。

○単元名：「自分の体について知る」

- ・ 第1時：「友達とのちょうどよい距離」
- ・ 学習問題：会話する時のちょうど良い距離を知る
- ・ ICT機器の活用場面：問題把握(声の大きさ確認、接近して話している人の写真を見ての感想)、追究活動(タブレット上の人物の移動)
- ・ ICT機器の活用方法：「ちょうどよい」という意味を、iPadのアプリを用いた声の大きさ確認ツールで体験する。教師があらかじめ撮影した「過度に接近して話している人たち」の映像を見たり、iPadで人物のイラストを動かしたりしてちょうど良い距離を考えた後、ロールプレイで実際の距離を体験する。
- ・ 生徒の様子：「ちょうどよい」という言葉を「自分が嫌じゃなくて、相手も嫌じゃない」という言葉に置き換えられることができた子がいた。タブレットを使うことで、具体的に「適度な音量」「適切な距離」を考えることができていた。特に知的には中重度の子でも、自分で考えながらタブレットを操作し位置関係を試すことで、納得してロールプレイに取り組める姿があった。



友達との距離を実際に体験する



高等部を想定して作成した電子教材の一例

○単元名：「男女の違い」

- ・ 第1時：「プライベートゾーンを知ろう」
- ・ 学習問題：男女の性差、小さい頃とは違う現在の自分を再確認し、他人に見せてはいけないところ、

触られたくないところなどを具体的に知る。

- ICT 機器の活用場面：問題把握（第一次性徴、第二次性徴の具体的な変化）、追究活動（タブレット上の人物への性徴による変化の書き込み）
- ICT 機器の活用方法：「ちょうどよい」という意味を、iPad のアプリを用いた声の大きさ確認ツールで体験する。教師があらかじめ撮影した「過度に接近して話している人たち」の映像を見たり、iPad で人物のイラストを動かしてちょうど良い距離を考えたりした後、ロールプレイで実際の距離を体験する。
- 生徒の様子：前单元よりも積極的に実物教材を取り入れることで、自己表現が苦手な子も、友達の意見を参考にしながらも、決してそれを追従するだけにならずに、自分の意見を表現することができていた。



男女一緒に、互いの違いを知る



大きめのイラストを使って意見を出し合う

○单元名：「プライベートゾーンを守るには」

①題材名「プライベートゾーンを守るには？」

②本時の目標

- 他人に見られたくない、見せたくない、触られたくないプライベートゾーンについて学んだ生徒が、プライベートゾーンを見せて良い人と見せてはいけない人について考え、区別をつけられるようになる。
- プライベートゾーンを見られそう、触られそうな場面を想定し、対応方法をロールプレイすることで、自分の身を守る行動が身につく。

③展開

	学習活動・学習内容	指導上の留意点	評価	資料等
導入	1 どこがプライベートゾーンなのかを確認する。	○前時に使用した「見られたくないところ」に付箋を貼った男女の絵を見せ、プライベートゾーンがどこかを提示する。		男女の絵 (前時の写真)
展開	2 プライベートゾーンを見せていい人、見せてはいけない人について考える。	○病院や温泉など、プライベートゾーンを見せても良い場合もあることを伝え、時と場合、相手等でどうするか考えさせる。 ○「見せていい人、悪い人 ○×クイズ」をおこな		○×クイズ スライド ○×札実物

	<p>3 自分はいやなのに、プライベートゾーンを見せる、触らせる、見られる、触られるような状況になったらどうするかを考え、実際に行動してみる。</p>	<p>い、判断の理由を説明する。(例) 警察官、先生、医者、近所の人、小さい子、親、支援者 等</p> <p>・見せていい人といけない人の正しい判断ができる</p> <p>○「見たくないのに見せる人がいたら」「触ろうとする人がいたら」「友達にチューしたいと言われたら」「友達にお尻を触られたら」等、いくつかの状況を設定して何人かがロールプレイする。</p> <p>○大きな声を出す必要がある場面で声を出す練習をする。</p> <p>・状況に合わせた正しい対応ができる</p>	<p>スライド</p> <p>iPad アプリ 「ノイズレベル」</p>
まとめ	<p>4 プライベートゾーンがどこか、本時学んだことを学習カードに記入する。</p>	<p>○プライベートゾーンがどこか、守るためにどんなことが大切かを学習カードに記入する。</p> <p>・プライベートゾーンを正しく記入できる。守るための行動を1つ記入できる</p>	<p>学習カード</p>



正しい判断をクイズ形式で学ぶ



個別の学習カードで学びを振り返る

5. 研究の成果

研究の目的と、それに対応する成果は以下の通りである。

目的①：児童生徒が自分自身で操作しやすい学習教材を開発する

目的②：開発した教材を用いた授業実践を行う。授業評価を元に、校内向けに「性に関する指導情報データベース」として公開する。

成果：各授業において、子どもたちが自分で操作できる教材を用意でき、その学習効果があがったと考えられる。知的障害や自閉症の子に対しては、追究場面では、本人が「納得するための時間」を保証する必要がある。その際、指先で簡単に操作でき、試行錯誤もしやすいタブレットは非常に適していることが確認できた。また、単元後半では特に新たなアナログ教材を積極的に取り入れたが、それも効果的であった。例えば「見せたくない・触られたくない」体の部分を考えながら、大判印刷した男女のイラストに付箋を貼るといった教材は、知的な遅れが軽度なグループにも、重度なグループにも使いやすく取り組みやすいものであった。このように追究場面で「考えること」と「意見を表明すること」を同時に行える教材を多数開発できたのは、基本となる電子データが多数用意できたからである。

目的③：「性に関する指導情報データベース」の中でも特に、基本的かつ効果的な学習教材と指導案データを校外に向けて公開する

成果：今年度は、校内の開発・活用を重視したので、校外への公開は、それに比較すると優先順位は低い目標である。しかし別途資料で示した通り、校外での学習会や研究会でこれらの教材を紹介したところ、非常に多くの反響を得ることができた。サーヴァを介した校外への公開は行わなかったが、希望校・施設には、基本データの頒布を行った。他校からも教材として導入したいという依頼が複数あるので、来年度に向けて検討を進めることになった。

6. 今後の課題・展望

今年度の研究は、実践授業の回数が当初予定より少なかったため、幅広い学齢での評価についてはデータ不足であることは否定できない。高等部で最も充実した実践が行えたのは、社会に出る時期が近づいているため、つけておくべき力の認識が担任と共有できていた面が大きいと思われる。今年度の成果を校内外によりわかりやすい形で伝達することで、他部での実践数を増やしていきたいと考えている。また同時に、当初の目的通り来年度は電子データの一般公開を全国レベルで行うことで、本校と他校の実践の共有を進めていきたい。

7. おわりに

本研究の代表者である竹内は、長野県教育委員会が作成した「性に関する指導の手引き」の作成委員でもある。その手引きの中では、特別支援教育における、性に関する指導について、以下のように述べられている。

『性を「発達課題」として前向きにとらえる』

特別な支援を必要とする児童生徒の性に関する指導では、性的問題行動の改善および解決を目的とした指導が多くみられる。しかし、目の前に現れている事象を問題行動ととらえ、禁止のメッセージだけを伝える「禁止の教育」に陥ることには留意しなければならない。

(性に関する指導の手引き 長野県教育委員会編 P17 より)

今回の研究を進める中で、改めてこの視点の重要性を意識した。「性を発達課題として前向きにとらえ」一人ひとりの発達段階に応じた指導支援をさらに進めるために、本研究をさらに深めていきたい。それが社会に出てからの子どもたちの、よりよい生活につながっていくことを信じている。

< 参考文献 >

- ・性に関する指導の手引き 長野県教育委員会編 (2014)